

繪に見ゆ、然れ共右の小歌は、元祿中うたへるにて、其頃より行はれしなり、

〔足薪翁記〕塗笠

裏繪又塗笠のうらを鳥の子、まにあひやうの紙にて張、花鳥の類を系がきたるものあり、俳諧根

無草寶永元年 印長角撰、何やかの物好キとりまけたるこそいとまめやかなれ、或塗笠に内繪かきたる模様

か、笠の内を、緋縮緬にて張り、淺黄羽二重のふと緒、大橋元祿八年 印本、正武撰、夕月にさても祇園の旅

詣、調夕、繪さへなつかし塗笠のうら、如泉、水飛羅免元祿十一年 印本、豐士撰、茗荷谷下りて曲ッて藤の棚、白絲、花

を彩るぬり笠のうら、木扨、春や昔印籠さげた女あり、蓬雨、土佐節の淨瑠璃和歌姫道行、對の花籠

しほらしき、四季おりくクの作り花、内繪のぬり笠ふかクと、其とりなりもみよし野のよし野

のお山を雪かと思れば、雪にはあらで、花のふッきと詠じけんしが、の山越朝あらし、

〔守貞漫稿〕二十九 塗笠○圖略

江戸ニテ士民トモニ大風雨等ノ時傘ヲ用ヒ難キ日ハ身ニ蓑或ハ桐油紙合羽ヲ著テ、此ヌリ笠

ヲ用フ、馬上ニモ著之、京坂ハ士民トモニ更ニ不用之、又塗笠形ハ異ナレドモ、昔ハ婦女ノ用トス、

今世ハ江戸モ女子ハ更ニ不用之、

〔貞徳文集〕上 乍無心之儀、摺箔小袖○中 塗笠○中 躍衆之裝束、不殘可被恩借候、

〔談林十百韻〕

禪尼の分ける苔の細道

ぬり笠に松のあらしやめぐららん

〔東海道名所記〕三 道中には駄賃馬のりかけに、雨合羽塗笠きて打過る、

〔甲子夜話〕四十一 羽州山形侯、秋、駿州田中侯、本、野州宇都宮侯、戸、常州土浦侯、土トハ、供ノ士ト徒士

ハ、皆塗笠ヲ冒ルト云、菅又ハ竹皮ノ笠ヲ用ヒズ

一朝
一鐵